

落第

夏目漱石

其頃東京には中学と云うものが一つしか無かった。

学校の名もよくは覚えて居ないが、今の高等商業の横  
辺り<sup>あた</sup>に在<sup>あ</sup>つて、僕の入ったのは十二三の頃か知ら。何

でも今の中学生などよりは余程<sup>よほど</sup>小さかった様な気がする。

る。学校は正則と変則とに別れて居て、正則の方は一  
般の普通学をやり、変則の方では英語を重<sup>おも</sup>にやった。

其頃変則の方には今度京都の文科大学の学長になった  
狩野だの、岡田良平なども居つて、僕は正則の方に居  
たのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎なども一緒だった。  
で大学予備門（今の高等学校）へ入るには変則の方だ

と英語を余計やつて居たから容易に入れたけれど、正則の方では英語をやらなかったから卒業して後更に英語を勉強しなければ予備門へは入れなかったのである。面白くもないし、二三年で僕は此中学を止めて了<sup>しま</sup>つて、三島中洲先生の二松学舎へ転じたのであるが、其時分此<sup>ここ</sup>処に居て今知られて居る人は京都大学の田島錦治、井上密などで、この間の戦争に露<sup>ロシ</sup>西<sup>ア</sup>亜へ捕虜になつて行つた内務省の小城なども居つたと思う。学舎<sup>がくしや</sup>の如<sup>ごと</sup>きは実に不完全なもので、講堂などの汚<sup>きた</sup>なさ<sup>き</sup>と来たら今の人には逆<sup>さか</sup>も想像出来ない程だつた。真黒になつた腸<sup>はらわた</sup>の出た<sup>たたみ</sup>畳が敷いてあつて机などは更<sup>さら</sup>にない。

其処<sup>そこ</sup>へ順序もなく坐り込んで講義を聞くのであったが、  
輪講の時などは恰度<sup>ちやうど</sup>カルタでも取る様な工合<sup>ぐあい</sup>にして  
やったものである。輪講の順番を定めるには、竹筒<sup>たけつづば</sup>  
の中へ細長い札の入って居るのを振って、生徒は其中  
から一本宛<sup>ずつ</sup>抜いてそれに書いてある番号で定め<sup>き</sup>たもの  
であるが、其番号は単に一二三とは書いてなくて、一  
東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八齊、九  
佳、十灰と云った様に何処<sup>どこ</sup>迄も漢学的であつた。中に  
は、一、二、三の数字を抜いて唯東、冬、江と韻許<sup>いんばか</sup>り  
書いてあるのもあつて、虞を取れば七番、微を取れば  
五番ということが直<sup>すぐ</sup>に分るのだから、それで定め<sup>き</sup>るの

もあつた。講義は朝の六時か七時頃から始めるので、  
往昔むかしの寺子屋を其儘そのまま、学校らしい処などはちつともな  
かつたが、其頃は又寄宿料等も極めてきわ廉くやす——僕は家  
から通つて居たけれど——慥たじか一カ月二円位だったと  
覚えて居る。

元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山たくさん読  
んだものである。今は英文学などをやつて居るが、其  
頃は英語と来たら大嫌いだいきらで手に取るのも厭いやな様な気が  
した。兄が英語をやつて居たから家では少し宛教ずつえら  
れたけれど、教える兄は癩癩持かんしゃくもち、教わる僕は大好きと  
来て居るから到底とうてい長く続く筈はずもなく、ナシヨナルの二

位でお終しまいになつて了しまつたが、考えて見ると漢籍ばか許り読んでこの文明開化の世の中に漢學者になつた処が仕方なし、別これに之と云う目的があつた訳でもなかつたけれど、此儘このままで過つぐすのは充つらないと思う処とから、兎かくに角大学へ入つて何か勉強しようと決心した。其頃地方には各県に一つ宛位中学校があつて、之これを卒業して来た者は殆ほとんど無試験で大学予備門へ入れたものであるが、東京には一つしか中学はなし、それに變則の方をやつた者は容易に入れたけれど、正則の方をやつたものだと更に英語をやらなければならないので、予備門へ入るものは多く成立学舎、共立学舎、進文学舎、

——之は坪内さんなどがやって居たので本郷壱岐殿坂の上あたりにあつた——其他之に類する二三の予備校で入学試験の準備をしたものである。其処そこで僕も大いに発心ほっしんして大学予備門へ入る為に成立学舎——駿河台するがだいにあつたが、慥たしか今の蘇我祐準の隣だつたと思う——へ入学して、殆どほと一年許りばか一生懸命に英語を勉強した。ナショナルの二位しか読めないのが急に上の級クラスへ入って、頭からスウキントンの万国史などを讀んだので、初めの中うちは少しも分らなかつたが、其時は好すきな漢籍さえ一冊残らず売つて了しまい夢中になつて勉強したから、終ついにはだんだん分る様になつて、其年（明治十

七年）の夏は運よく大学予備門へ入ることが出来た。同じ中学に居つても狩野、岡田などは変則の方に居たから早く予備門へ入つて進んで行つたのだが、僕などが予備門へ入るとしては二松学舎や成立学舎などにまごつて居た丈遅れたのである。

何とか彼かんとかして予備門へ入るには入つたが、情なま

けて居るのは甚はなはだ好きで少しも勉強なんかしなかつ

た。水野鍊太郎、今美術学校の校長をして居る正木直

彦、芳賀矢一なども同じ級クラスだったが、是等これらは皆な勉強

家で、自おのずから僕等なまの怠け者の仲間とは違つて居て、其

間に懸隔けんかくがあつたから、更に近づいて交際する様なこ



ともなく全然離れて居つたので、彼方でも僕等の様な  
怠け者の連中は駄目な奴等だと輕蔑して居たろうと思  
うが、此方でも亦試験の点許り取りたがつて居る様な  
連中は共に談ずるに足らずと觀じて、僕等は唯遊んで  
居るのを豪いことの如く思つて怠けて居たものである。  
予備門は五年で、其中に予科が三年本科が二年となつ  
て居た。予科では中学へ毛の生えた様なことをするの  
で、数学なども随分沢山あり、生理学だの動物植物鉉  
物など皆な英語の本でやったものである。だから読む  
方の力は今の人達より進んで居た様に思われるが、然  
し生徒の氣風に至つては実に乱暴なもので、それから

見ると今の生徒は非常に温順おとなしい。皆な悪戯いたづら許ばかりして居たものでストーヴ攻ぜめなどと云つて、教室の教師の傍にあるストーヴへ薪まきを一杯くべ、ストーヴが真赤になると共に漢学の先生などの真面目まじめな顔が熱いので矢張やはりストーヴの如く真赤になるのを見て、クスクス笑つて喜んで居た。数学の先生がボールドに向つて一生懸命説明して居ると、後から白墨チヨークを以つて其背中へ怪しげな字や絵を描いたり、又授業の始まる前に悉ことごとく教室の窓を閉めて真暗な処に静まり返つて居て、入つて来る先生を驚かしたり、そんなこと許ばかり嬉しがつて居た。予科の方は三級、二級、一級となつて居て、最初

の三級は平均点の六十五点も貰<sup>もら</sup>つてやつとこき通るには通つたが、矢張り怠<sup>なま</sup>けて居るから何にも出来ない。恰<sup>ちやうど</sup>度僕が二級の時に工部大学と外国語学校が予備門へ合併したので、学校は非常にゴタゴタして随分大騒ぎだった。それがだんだん進歩して現今の高等学校になったのであるが、僕は其時腹膜炎をやつて遂々<sup>とうとう</sup>二級の学年試験を受けることが出来なかった。追試験を願つたけれど、合併の混雑やなんかで忙しかったと見え、教務係の人は少しも取合つて呉<sup>く</sup>れないので、其処<sup>そこ</sup>で僕は太い考えたのである。学課の方はちつとも出来ないし、教務係の人が追試験を受けさせて呉れない

のも、忙しい為もあるうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立つた処で何事も出来ないから、先<sup>ま</sup>ず人の信用を得なければならぬ。信用を得るには何<sup>ど</sup>うしても勉強する必要がある。と、こう考えたので、今迄の様にうっかりして居ては駄目だから、寧<sup>いっ</sup>そ初めからやり直した方がいいと思つて、友達などが待つて居て追試験を受けろと切<sup>しき</sup>りに勧<sup>すす</sup>めるのも聞かず、自分から落第して再び二級を繰<sup>くり</sup>返<sup>かえ</sup>すことにしたのである。人間と云うものは考え直すと妙なもので、真<sup>ま</sup>面<sup>め</sup>目になつて勉強すれば、今迄少しも分らなかつたものも瞭<sup>はつきり</sup>然と分る様になる。前には出来なかつた数

学なども非常に出来る様になつて、一日親睦会あるひしんぼくかいの席上

で誰は何科へ行くだろう誰は何科へ行くだろうと投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票された位であつた。元来僕は訥弁とつべんで自分の思つて居ることが云えない性たちだから、英語などを訳しても分つて居い乍ならそれを云うことが出来ない。けれども考えて見ると分つて居ることが云えないと云う訳はないのだから、何でも思い切つて云うに限ると決心して、其後は拙ますくても構わずどしどし云う様になると、今迄は教場などで云えなかつたこともずんずん云うことが出来る。こんな風に落第を機としていろんな改革をして勉強したのであ

るが、僕の一身にとつて此落第は非常に薬になつた様に思われる。若し其時落第せず、唯誤魔化して許り通つて来たら今頃は何んな者になつて居たか知れないと思う。

前に云つた様に自ら落第して二級を繰返し、そして一級へ移つたのであるが、一級になるともう専門に依つてやるものも違ふので、僕は二部の仏蘭西語を扱んだ。二部は工科で僕は又建築科を扱んだがその主意が中々面白い。子供心に異なことを考えたもので、其主意と云うのは先ずこゝである。自分は元來変人だから、此儘では世の中に容れられない。世の中に立つて

やつて行くには何うしても根柢こんていから之これを改めなければ  
ならないが、職業を扨たんで日常欠く可べからざる必要な  
仕事をすれば、強しいて変人を改めずにやつて行くこと  
が出来る。此方こちうが変人でも是非やつて貰わなければな  
らない仕事さえして居れば、自然と人が頭を下げて頼  
みに来るに違いない。そうすれば飯の喰外くいはぐれはないか  
ら安心だと云うのが、建築科を扨たんだ一つの理由。そ  
れと元来僕は美術的なことが好であるから、実用と共  
に建築を美術的にして見ようと思つたのが、もう一つ  
の理由であつた。僕は落第したのだから水野、正木な  
どの連中は一ツ先へ進んで行つて了しまつたのであるが、

クラス

僕の残った級には松本亦太郎なども居つて、それに文学士で死んだ米山と云う男が居った。之は非常な秀才で哲学科に居たが、大分懇意にして居たので僕の建築科に居るのを見て切りに忠告して呉れた。僕は其頃ピラミッドでも建てる様な心算で居たのであるが、米山は中々盛んなことを云うて、君は建築をやると云うが、今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すなどと云うことは逆も不可能な話だ、それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝える可き大作も出来るじやないか。と米山はこう云うのである。僕の建築科を扱んだ



のは自分一身の利害から打算したのであるが、米山の論は天下を標準として居るのだ。こう云われて見るとなるほど成程そうだと思われるので、又決心を為直してしなお、僕は文学をやることに定めたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから、其処そこで英文学を専攻することにした。其後は変化もなく今日迄やって来て居るが、やって見れば余り面白くもないので、此頃は又、商売替をしたいと思うけれど、今じゃもう仕方がない。初めは随分突飛なことを考えて居たもので、英文学を研究して英文で大文学を書こうなどと考えて居たんだったが……。

底本…「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出…「中学文芸」

1906（明治39）年9月15日

※底本は、本作品を「談話」の項におさめている。

入力：Nana ohbe

校正…米田進

2002年5月10日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。